関係の中で育まれる

前川良太

ぞう組さんは今、就学に向けての引継ぎ資料の作成の真っ最中です。つばさでは、単に資料ひとつで引き継ぐのではなく、その子のありのままの姿、特に子ども自身が自分でなかなか表現できないところを重点に置いて、直接就学先の学校とやり取りするようにしています。その過程でよく「できるかどうか」というところにとらわれがちな大人の視点に気づかされます。ですが園で過ごす子どもたちの姿を見ていると、「成長」という言葉の捉え方が、少しずつ揺さぶられることがあります。

きりんぐみのしゅんのすけくんは、どこかいつも自信なさげな様子の子でした。こちらが何かを聞いても、分かっていないのか、それとも分かってはいるけれどどう答えたらいいのか分からないのか。言葉にできないまま、泣いてその場をやり過ごしたり、逃げ出すようにその場から離れてしまったりすることもありました。それでも彼の心の中の感情の動きや葛藤は伝わってきていました。揺れていることも、迷っていることも、感じ取れる。だからこそ、それが言葉や行動として外に出てこないことに、私自身ももどかしさを感じていました。しかしどこかでしゅんのすけくんは、「伝えたい」というよりも、「察してほしい」と願っているようにも見えました。

そんな彼に、大人として、私は基本的にはじっと待とうとしていました。こちらから答えを決めつけるのではなく、選択肢を出したり、言葉を少し補ったりしながら、彼自身が選べるように関わることを大切に。ただ、待ちきれずに悶々とすることも多かったのが正直なところです。「もう少し伝えてくれたら」「ここまで来ているのに」そんな思いを抱えながらのやり取りでもありました。

今年度に入って、そんなしゅんのすけくんの言葉はみるみる増えてきました。ただ、それは単に言葉数が増えたということだけではありません。話すときの表情や声の出し方から、自信をもって言葉を使っているように感じられるようになりました。もともと彼の心の中には、たくさんの言葉や思いがあったのだと思います。それが、外に出せていなかった。だからこそ、私自身も悶々とし、もどかしさを感じていたのだと、今は振り返っています。

この変化は、単に「できるようになった」という成長とは少し違うようのではないでしょうか。むしろ、関係の広がりだと感じています。友だちとの関わりが増え、大人とのやり取りも、表面的なものではなく、心から楽しみ、求めるようになってきました。ただし、「関係の広がり」と言っても、友だちが増えることや、誰とでも仲良くなることではありません。誰かと一緒にいても大丈夫だと思えること。自分の気持ちを出しても、受け止めてもらえると感じられること。その安心感が、少しずつ自分の外へと広がっていくこと。私は、そのことこそが育ちなのだと思っています。そんな姿は運動会でもたくさん見られました。しゅんのすけくんとやりたいとあおいくんに誘われ、一緒にしたパウパトごっこは本当に楽しそうでした。しゅんのすけくんの中にあおいくんがいて、あおいくんの中にしゅんのすけくんがいて、そんなお互いの存在や関係性が垣間見える時間でした。

そんな姿から、成長するということは、知識や技能が増えることだけではないと、改めて教えられました。さまざまな体験をし、心が動き、人との関係が耕されていく。その積み重ねの中で起こる変化こそ、「育つ」ということだと思います。「できるか、できないか」で測られる育ちではなく、関係の広がりこそが育ちであること。子どもたちの姿は、私たち大人がつい分かりやすさや結果で捉えてしまう「成長」というものを、確かに問い返しているように感じています。